

慈光

第三十七卷 第九号

次

唯仏与仏の知見	近角常観	(1)
共に是れ凡夫のみ	白井成允	(5)
黎明のよろこび	井上善右エ門	(10)
足利浄円先生の面影	西元宗助	(13)
わが心地獄	木村無相	(16)
自照のこころ	佐々木徹心	(19)
歎異抄に導かれて	花田正夫	(22)

目

唯仏与仏の知見

唯仏与仏—清華文の方便品

近角常観

明治31(1896) 昭和16(1941) 72頁

二乗の智慧

唯仏与仏の知見とは、ただ仏と佛とのみ知ろし召す処であるという事でありませぬ。大無量寿経の東方偈の文に、如来の智慧海は、深広にして涯底なし。

二乗の測る所にあらず、唯仏のみ独り明かに了り給ふとあるように、如来の廣大無辺なる智慧の境界は、深く広くして涯底のないもので、われ／＼人間の測り知る事の出来ないものであります。ただ仏と仏とのみ能く知ろし召す処であるというのであります。

昨今私の心の中は、母が病気で今にも知れぬという有様で心配をしているのでありますから、誠に余裕のない次第で、何となく心許ない気分でお話申しているが、然し一面においてかかる場合に、私のただかして貰っている心の有様を皆様に聞いて頂き、如来の廣大なる思召を味わして貰う事は、かえってそれがよからうと思つて、今日もしばらくお話する次第であります。

先週の土曜日に大学病院へ母を連れて参りました処が、

と。人生の夢の如く、幻の如く、響の如く、電の如く、影の如く、一切空無我で、実にあてにならぬ、たよりにならぬ、力にならぬ有様であります。これを如来は御覧なされて、憐れみましまして、かかる人生の中に迷ひ苦しめる私共を救わんがために、此の夢にあらわれて、何処々々までも助けねばおかぬとの大慈大悲の光明をもてあらわれましましたる広大の御真実であります。人生は如何ともしかたのないもので、今現に私は子として親を助けることも出来ず、此のあてにならぬ、しようのない人生、生老病死に迷ひ苦しめしめるのを仏かねて御覧下されて、何処／＼までも見捨てぬぞとの広大の御真実なのであります。

『汝一心正念にして直に來れ、我れ能く汝を護らん』との大きな御喚声、御真実を聞き、この思召を頂いて見れば、今日まで自分の思わくから、こうしたいとか、あゝ、したいとかと思つていたのは、そも／＼誤りであつたので、善いも悪いも、いかようにならうとも、すべて如来の広大なる思召に従いまかせ奉つて、ただ仏と仏とのみ知ろし召す御真実を喜びただかせて貰うより外はない。ここに安心の出来たのが信心のいただけた処なのであります。

安養浄土の莊嚴は、唯仏与仏の知見にてしり

究竟せる事虚空にして広大にして辺際なし
如来浄土の有様は、ただ仏と仏とのみ知ろし召す広大な

如来の智慧海は深広に及ぶは
仏と仏との御はわらひなり、如来のけりありはあり
補処の功徳を説くは、如来の御はわらひなり、如来のけりありはあり

著しく脈が悪かつたものだから、お医者様も大層驚かれて、すぐさま連れて帰れとのことで、皆のものも大に周章で寝台で連れ帰つたのであります。その時に母の感じた事は「大勢がこのように騒ぐが、いよ／＼自分も今が最後であろう。平日より聞かせて貰つてゐるが、此期に及んでは何を考えた処が最早や如何ともしかたがない。こういうようにあてにならぬ、しようのないものを憐れ給う如来の広大のお慈悲であるから、それを有難く喜ばせて頂いた」と、その翌日も、また一昨日も私に話された事であります。先に引いた同じ偈文の中に
一切の法は猶し夢と響との如しと覺了し、
諸の妙願を満足して、必ず是の如きの刹を成ぜん。
法は電と影の如くなり知りて、菩薩の道を究竟し、
諸の功徳の本を具して、受決して当に作仏すべし。
諸法の性は一切空無我なりと通達して、専ら浄仏土を求めて、必ず是の如きの刹を成ぜん。

る境界であつて、凡夫善悪の心にては如何とも測り知る事は出来ない。ただとかくの凡夫のはからいを打ち捨てて如来の御真実に従いまかすの外はないのであります。

親鸞におきては、たゞ念仏して弥陀に助けられまいらすべしと、よき人の仰せを蒙りて信するほかに別の子細なきなり。念仏はまことに浄土に生るるたねにてやはんべもて存知せざるなり。たとい法然上人にすかさされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候。その故は、自余の行をばけみて仏になるべかりける身が、念仏をまうして地獄にもおちて候はばこそ、すかさされ奉りてといふ後悔も候はめ。いづれの行も及びがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

と、歎異抄にある通り、人生は暗黒である。生も死も地獄も極楽も、何もかも自分としては見通す事は出来ない。ああしたい、こうしたいと自分のはからいを立ててやつて見ても、どうしても思うようにならない。このどうする事も出来ない者を、何処／＼までも御見捨てなき如来の御真実があるのであるから、自分としては総じてもって存知しないのだが、『ただ念仏して弥陀に助けられ参らすべし』とのよき人の仰せを蒙りて信する外には別の子細はないのであります。何等の善根功徳をも積む事の出来ないこの身であ

つてみれば、とても地獄は一定すみかの身の上、たとい念
仏して地獄におちたりとも、更に後悔すべきことは何もない。
善いも悪いも、すべて如来にまかせまいらせて、如来
の御真実に安心させて頂くのであります。

私の母は更につけ加えて申しますに「これは私一人がそ
うであるばかりではない。誰も彼も同じことであるから、
それを知らねばならぬ」と。いかにも無常転変まわりな
き此の人生に於ては、誰も彼も、仏の「何処々々までも見
捨てぬぞ」との御真実一つで救われるのであります。人間
の力のつきはてて如何ともすべからざる処を憐み給う廣大
の御真実一つで救われるのであります。歎異抄第九章に仰
せられたように「念仏を申しても踊躍歡喜の心も一向に起
らないが、この喜ぶべき事を喜ばぬにて、いよ／＼往生は
一定と思わなければならぬ。喜ぶべき心を抑えて喜ばせな
いのは煩惱の所為である。然るに仏かねてこれを御覽下さ
れて、煩惱具足の凡夫であるから、喜ばぬのも無理はない
と仰せられたる事であるから、他力の悲願は、かゝる浅間
しき私共のためである事を知らせて頂いて、いよいよたの
もしく有難く思われるのであります。又何か病氣にでもか
かってみると、死にはしないかしらと心細く思われるのも、
同じく煩惱の所為である。久遠劫の昔から今まで流転し來
った苦惱のこの娑婆は捨てがたいもので、未だ生れざる安

弥陀成仏のこのかたは、いまに十劫をへたまへり

法身の光輪きはもなく、三世の盲冥を照らすなり

十劫このかたの如来の御苦勞であります。三世十方の諸
仏も、三國七高僧も、皆このやるせなき御真実をわからせ
ようとの御苦勞に外ならぬ。此の広大なる御真実をきかせ
て貰えば、これをきく一念に、「ちからなくして終る時に、
かの土へはまいるべきなり」と、お慈悲を聞きひらいた一
念が、命の終つた時であります。即得往生とは、この廣大
なお慈悲を頂いた時で、これが一念である。私共は如来の
恵みの深きことを仰ぎ喜びて安心させて頂くので、幸に生
命生き延びてなお慈悲を喜ばせて貰うことが出来れば、
まことにありがたいが、またこの生命終りても、安養の浄土
に生れさせていただく事であるから、これまたまことにあ
りがたい事であります。どうなるうと、こうなるうと、唯
佛与仏の知見で、広大な御真実を南無阿弥陀仏と喜ばせて
いただくのであります。

大正六年十二月発行 「法蔵」より

1931



養の浄土は恋しく思われないのは、まことによくよく煩惱
が盛んであるからであります。名残り惜しく思うけれども、
娑婆の縁つきで、力なくして命終る時、お浄土参りをさせ
て頂くので、急ぎ参りたき心のなき私共の様な者を、特に
憐れみましますとは広大の御真実であります。「人生の愛別
離苦の絶えぬ処、之を御覽下されて、一切衆生を悉く恵ま
んとて微妙嚴浄の御浄土を建立し超世の本願を建てまし
して、我れ能く汝を護らんとの大慈大悲の御呼び声であり
ます。

今日、私の母の病氣しましたにつけても、皆様の御心の
中にも色々の切なる心配のあることを御察しするのであり
ます。人間の力の及ばぬ事は誰しも同じであります。病氣
というような境界でない人も、壮健であるというて居ても
誰にても、この如来のやる瀬のない御真実を聞いてみれば、
私共の我慢、妄執、思わく、すべてを打ちすてて、如来の
本願海に浮ばせて頂き、喜ばせて貰う外はないのでありま
す。私の母も、最早回復の余地がないというわけでもあり
ませんけれども、信仰の問題としていつでも余地はないの
であります。如来の方より云えば、現在只今が余地のな
い有様でありますから、これを憐れみまし／＼て、即今、即
刻、一心正念にして直ちに來れと喚びかけ給うのでありま
す。

高原憲氏遺詠

何もかも我一人のためなりき 今日一日のいのちたふ
とし

母病めば秘密の箱をあくるごと ためらひつつも聴診
器をとる

はづかしや味なき水に味つけし 我がはからひのあは
れかひなき

はづかしや医師となりて四十年 自然治癒をしりそめ
し我、

あすありと知るよしもなき我なれば 今日一日を生き
抜かんと念ふ

ゆれながら磁針の北をさすがごと わが足許は西へ向
かはん

水の味なき味をしりえてぞ 無碍の天地に通ずる心

共に是れ凡夫のみ



白井成允

聖徳太子の十七條憲法——第十條

十に曰く。忿を絶ち、瞋を棄て、人の違を怒らざれ。人には皆心有り、心には各執れること有り。彼れはみすれば則ち我れは非みし、我れはみすれば則ち彼れは非みす。我れ必ず聖なるに非ず、彼れ必ず愚なるに非ず。共に是れ凡人なるのみ。是みし非みするの理、いかに能く定むべき。相共に賢く愚なること環の端無きが如し。是を以て、彼の人は瞋ると雖も還りて我が失を恐る、我れ独り得たりと雖も、衆に従い同じうして挙う。

この条のような教が千三百年の昔に、私共の祖先に示されているといふことは驚くべきことだと思ふのです。私は現代の世界の指導者と言われる方々にこの太子様の教が分つて頂ければ、こんな争いを続けるという事態は無くなるであらうと思ふのです。ところがこの十条のような考え方は西洋には無いと云つていいので、それが人類の禍いの

源であると私は思います。

この条のお言葉は分り易いようですが、私共のいかりの煩惱をいかに処理したらよいかという誠めです。怒りが世間に禍いを起す本になるので、「和」の理想を掲げたこの憲法に於いて、怒ること勿れというこの條の教は、和ということの逆の理念の方から、如何にして人は和を実現出来るか、それを反省せしめて下さる教であります。

始めに「忿を絶ち瞋を棄て」とありますが、平安朝の学者が、忿という字に「こころのいかり」、瞋は「おもてのいかり」と読みをつけて下さいます。心が外に現われる、怒る勿れと誠めて下さるのです。「人の違を怒らざれ」と、怒りということを考えて見ますと、人の考えが自分の考えと違つてゐる。そこに怒りが出てくる。だから相手の人が自分と違つた事を考え主張し行つてゐる。その場合に、腹を立て怒つてはならない。その理由を次に詳しく述べていて下さる。

氣遠い

「人には心有り、心には各執るところあり」執という字は執着といふことで、我々の心には皆何かの執着がある。これは家庭でも世間でも世界でも皆その無い人はない。民主主義でも自由の原理がよいのだと、又、社会主義の国は統制の原理が良いと皆主義や主張を持つてゐる。だから異なる主義主張の間に争いが起る。それで「彼れはみすれば則ち我れは非みす」、でこれで同じ人間の組織でありながら、自由主義がい、とか統制主義がよいと言ふ。同じ日本人でありながら自民党のよしとする処と社会党のそれと喰ひ違つてゐる。人間の世の中にはいつもこういうことが出て参ります。その主張を異にする根本を考えてみると、自分は何か物の道理が了り、賢い判断をしてゐるのに、相手がさつぱり道理がわからん、愚かな氣狂いの様な奴だと、思いこんでゐる。西洋の考え方で言へば、我れは神の陣営に属する、汝は悪魔の陣営に属する。それは西洋の宗教が神と悪魔の戦いを原理としていますから、悪魔の陣営に属する者を征服してしまわねばいけないという立場が西洋の宗教に始終出て参りますから、こういう是非善悪の争いが起つてくるのです。

然し自分の方は聖で、よく物の道理が了つた者、向うは愚で、物の道理が了らんとするのでなくて、我れも彼れも共に凡夫なるのみ。この「共に是れ凡夫」という言葉は非

常に重要なお言葉で、どちらも共に平凡な人間に過ぎないといふ自覚ですね。そう言へば何でもない事のように思われますが、実は凡夫だと知るのは容易ならざる事なので、誰も自分の主義主張に執着するところに自分をひとかどの偉い者だと已惚れている。それが砕けなければ自ら凡夫だと思へない。ひとたび己れが凡夫と気が着いた以上は、そこに始めて凡夫の分際として、これが絶対的に善だ、これは絶対的に悪だと定める知恵はないと知らされる。そんな智慧は仏様に於て始めてありましようが、その仏様の智慧は、私共の善悪の相対的な判断とは異つて、如何なる悪をも必ず転じて善と成す絶対的な智慧が仏様にははたらいておいでになる。それは私共凡夫では計らい得ないところである。

聖徳太子様は共に是れ凡夫なるのみと仰せられたが、親鸞聖人のお言葉には、凡夫というのは、欲を起したり、愚痴をこぼしたり、高ぶつたり、ねたみそねんだりする心が命終るまで離れない、凡夫の心はそんなものだと言つておられます。だから「相共に賢愚なること環の端無きが如し」環の字はミミガネと訓ませてきました。辞書にはユビワともあります。耳を飾るにも、指を飾るにしても、すべて輪でありますから、どこを端としてつかむことはできない。これは善であるからとぐるぐると輪を廻して行くと、そこ

343 (明) 277 (清)

が善になつてしまふ。悪であると輪を廻して行くと、それが善になつてしまふ。そういうとりとめのないのが人間の執着する善悪というものであるということを教えて下さる。

然しそういうことだけ言っていると、例えば第九条に「信は是れ義の本なり」という、義という人の行の筋道ということが曖昧になります。然しそれは如来の眞実を頂くところに自ずから善悪のすじ道が知れてくるのであって、私共自分を中心にした計らいの中に、善とか悪とか言っている自己中心のとりとめもないことだということを言つて下さるのです。云々。

「是を以て、彼の人は瞋ると雖も還りて我が失を恐る」向うの人が自分に腹を立て怒つて来た時に、すぐに腹を立て怒り返すということをしなくて、あの人があんなに腹を立てたのは私の方に何か間違いがあつたのではなからうかと反省していく、こういう心があれば、個人間の事でも、国と国との間でも争いの大部分は無くなつてしまふ。但しこのことは言うは易く行は難いのであります。如何にしてこういう態度に出られるであろうか。私共にとつて大きい問題でありましょう。

多量の

に遊んでいる。ああいう国家が一つになつて興隆の基礎を作られた太子様ですから、御自分の節操もなく、民衆の云うなりになつて流れて行くということではないと思ひます。

それでは「衆に従ひ同じうして挙る」ということかと思ひます。私はここに大乘の菩薩の同事の行とすることを讀みます。同事とは事を同じうする、菩薩は人を救うためにその人に同ずるといふ、同ずるとは一緒になる、例えば看護婦さんが病人を看病する時には病人の肉体や心持の苦しみに同情し同感する。病人と共に喜び、共に悲しむといふ処に菩薩の同事の行が現われてきます。それで私は第十条のこの同といふのは、そういう意味だと思ひます。民衆の喜びを喜びとし、悲しみを悲しみとして、衆に従つて同じうして政を執つてゆく処に政治家としての根本原理があるのです。それは我れ独り得たりという、自分は物の道理が分つてゐるから、お前達は俺の云う通りにしなければいけないと指導者ふうになつて行つて、その人々の内側から同情し同感しながら種々の方便を以てその人々を正しい道に導くといふのが菩薩の同事の行でありますから「從衆同拳」とはそういう同ずる心持である。このように読みますと第十条の意味がはつきりすると思ひます。

これは、最近の日本人の、何か事があると、絶対に反対、

ですが、昔、屈原という人が、世間は尽く濁つて我れ独り清しと言つて怒り、河に身を投じて死んだ話があります。又世の中は皆理の分らん者ばかりだと云つて世を棄てるということも屢々あります。己をいさぎよつて世と別れて清く保とうとすることが現われて来ますが、太子の立場はそうでなくて、我れ独り得たりと雖も多くの人々に従つて「同じうして」、これは「同じく」と読んでいますが、それは太子様の仰言るところがはつきりしないようですから「同じうして」と読みます。その意味は「從衆同拳」を皆の言つて通りに一緒にして行なえと読んでいきますと、自分の主義、節操をすてしまつて民衆の言つた通りに動いて行くということになりましょう。

ところが、太子様の御生涯を仰ぎますと、国内に於いても日本国の非常に困難な時代に、悪くすると国は二つに分裂してしまつて国乱れざるを得ない、そういう時勢にこういう憲法を作り、和という理想を掲げ、仏様の教に依つて日本民族の精神的基礎を永遠に定めて下さつた、それによつてあの時代の日本国は救われました。そして太子様が亡くなられてより僅か百年の間に、日本は国家としての体勢を整え、国の法律を制定し、国の歴史を作り、横と豎、時間的にも空間的にも日本国を統一せしめることが出来たから、天平の文化、特に万葉集等を生み出して民衆が芸術的

絶対と云いますが「共に是れ凡夫のみ」といふ言葉を味つてみますと、貴君の考えと私の考えは可成り違つていまして、共に凡夫だから相談し合つてよい智慧を出しなさいよといふところに、民主主義の根本原理が行われると思ひます。この十条は今の時代に皆が省みて頂くべき尊いお言葉と思ひます。

今の時代は皆が偉い人、正しい人ばかりになつて角突き合せていて、片一方では、我れは神の陣営に属する、これに反する者は悪魔だから、これに戦ひ勝たねばならないと主張し、片一方では、神なんか有るものかと否定し、唯物有るのみと、唯物史観の立場を絶対の眞理とし、人類全体がこれに従わなければいけない、俺がそれに従わせてやるんだと、我れは絶対の眞理に立つてゐるといふ傲慢な執着、その角突き合ひのようです。そこに共に是れ凡夫のみといふ尊い教え、それは大乘仏教の根本原理である空するところに、世間を救う菩薩のはたらきが出てまいりますので、これに似たことが太子様の『勝鬘經義疏』の中に、菩薩は「衆流に冥合して敢て異趣なし」と人々の諸々の考へに入り込んで、民衆が迷つていけば、その迷つてゐることに自分が融け込んで行つて、民衆の迷うその道理をよく知り尽して、その迷いを転じて証りの道に入れる事が出てきます。

或は『維摩經義疏』の中に、「己よくすと雖も然も世に異りて自ら異とすることなし」とありますが、これが從衆同拳のところです。自分がよく出来るからと云って、世間から抜け出て自分だけ異った事をして得意とするということは菩薩にはないのであります。

ともかくこの十条は、怒りの心を鎮めてある条でありませんが、その根柢として深く、機微に徹り入ると共に、博くあらゆる人々に同情する広大な意味を有し、如何にもよく仏心に住して民衆に臨みたまうた菩薩太子のお言葉たるを思わしめます。同時に此の如き言葉は世界の文献の中に稀にしか見られない貴い言葉として度しみ聞かざるべきものであります。

私共は千三百年昔から既にこの言葉を頂いていた、私共の祖先の創りて遺し伝えた文化の精髓にはこの貴い教を生んだ精神が流れています。是れ人類に永遠の平和をもたらすべき不滅の光であります。



黎明のよろこび

「信心に卒業はない、永遠の黎明がある」という福島先生のよき言葉は真実の道を深く味わせて下さいます。不思議なもので、何とも思わず過ぎていた言葉や事柄に、いと大きな感動と光を覚えることがあります。それは雲間から光が射し込むとでもいった出来事でしょう。最近、才市さんのうたを読んでいてふと大きな感銘を覚えました。それは、

なんともない なんともない
なんともない なんともない

如來さんが
このわしを連れのうちで往ぬる

行きなざるで ありがたい

ということです。そのどこに感を新にしたかというところ、如來さんが、この私をつれて行きなざるで有難い」というところ、何かおぼろげなところに、はつきりした光がさして、磐石に乗ったという感じです。それはどうしてであるかと自ら振り返ると、往生という大事に人間的な何かが混り込んでいたように思います。大悲に摂取された身の必

古稀を迎えて

福本慶子

業のことわからずとこそ師に問ひし若き日ありと思ふ
この頃

生きざまをわが業なりと知る日まで慈悲の光に育てられしか

慶といふ仏縁深き名を持ちて七十年を生き来し我は

悲しみは絶ゆることなし我心時には涼し御名に帰りて

鈴虫ときづきし日より風たちて夕やみくればその音またるる

つゆ萩は色こきものよそをめてし君は帰りぬ寂光の国

1.8.6.

井上善右エ門

然のことわりであるとしても言った思考要素が潜在していたことに由来するようです。大悲に値いながら往生に思考の影をまじえている、我が足では往かれぬところに我れ識らず我が足を差し出していたのです。役にたつたぬものにさざられて、最も明確であるべき事に霞がか、ついていた、その霞が散じて、私はどうあろうとも如來さんが連れてゆかれるという確乎不拔のたしかなる光がヌツと現われた、それに心うたれたのであると思います。

仏心の真実にお値していても、人間意識の雲霧はまたしてもまたしてもただようて止まぬのですが、それが却って永遠の黎明のさわやかさを知らしめられる有難い機縁ともなります。才市さんが二十一年間、あの感動の詩を書きつけたのも、果しなく湧く黎明のよろこびを讃えられたのであります。

さてまた才市さんの別のうたに、

仏の心は不思議なものよ

目には見えねど話しができる
仏と話しをするときは
称名念仏これが話しよ

とある一首にもまた感を深くしました。「仏恩報謝の念仏」ということは、もとよりゆるがぬ教えです。いつも才市さんがそのうたの終りに「ご恩うれしや なむあみだぶつ」というているのがそれです。ところが念仏がいつの間にか「報謝」という観念の型にはまってしまつと、生きた念仏のいぶきが失われることにもなりましよう。

知己の方で真面目な念仏者のさる方が「どうも私には報謝の念仏という御文章の仰せがピッタリしません。報謝という殊勝さは私にはない。その私にお与え下さつた念仏はもつと／＼広大な仏心の賜物であり、報謝に尽きぬ意味と徳が宿っていると感じられます。」と云われた言葉が思い出されます。その方の心には、念仏の広大さを報謝の中にとじ込めてはならぬとでもいう気持が察しられ、感じられましたので、何か申したいことはありましたが、私は黙して承っていました。

ところで今の才市さんのうたでは、念仏が仏様との話し合いになっています。そこでは報謝の念仏が如来様との楽しい会話に転じています。そして生々とした有難さがにじみ出ているのです。そう思うと甲斐媪が、

さらにもまた「念仏の声だに口に絶えせねば 名よりひらく信心の華」と申された先徳があります。ここにもまた念仏の奇しき働きが讃えられています。かかる念仏に育てられて信海に浮び出る方々もあることでしよう。願力の御働きは広大無辺です。雲霧は常に漂いますけれども、永遠の黎明のよろこびを味い楽しみ仰がせていただきます。

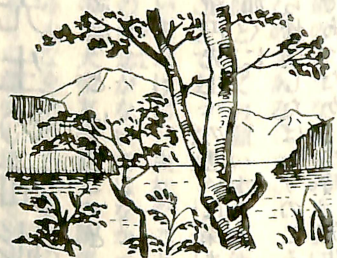
昭和六十年七月二十九日。

(追記)小生お蔭様で次第に元氣になっています。御放念下さい。ただ目が急に衰えてかすむ様になつてきました。老令というものを嫌な感じに感じます。

八月は白井先生の十三回忌を迎えます。 井上生。

白井先生 昭和四十九年八月二十九日 死

(白井先生 五十五巻 五十号)



み仏をよぶわが声はみ仏の
われをよびますみ声なりけり

と詠じているところにも、全く同じ念仏のころがほとばしっていることが感じられます。また、

み仏のみ名を称ふるわが声は
わが声ながらとふとかりける

という一首には、わが念仏を拝んでおられるお姿が偲ばれます。念仏には無量光が射しこむのでありましよう。その念仏の忝けなきを仰いで聖人が「應報大悲弘誓恩」と正信偈に誦された一句には、大悲の恩を感佩される謙虚素純なお心がにじみ出ているのを覚え、また何とも言いようのない有難くも尊い感銘が身に沁みます。それをいつしか、念仏を我が励む往生の業のごとく思いなす人々の生じたのに対して、念仏はただ／＼有難さの自然にほとばしる称名でありますぞと諭されたのでありましよう。報謝の二字には言葉を越えた仏慈への感歎の情が宿っていると私は思います。何よりも大切なことは如来の恩徳の高きことを知らせていただくことです。そこから天衣無縫の念仏が流れ出る。それは最早や人間のはからいをはるかに／＼超えた響流十方の弘誓の現われであります。

慈光あまねし

東野義子

昭和六十年

衰えと足思む老いのこの身には一入懐かし祖師御旧跡

露ほども尽し残せしこともなくただみ恵みに八十路た

どりつ

命かけて願ひし道は須臾に過ぎただお慈悲のみ永遠に
いたたく

目にも見えぬ仏堂背負ひこの半世無為の懺悔も大悲のう
ちに

生まれがたき人生に生れ、遇い難きみ法に遇いて八十路
ゆくとは

うるはしき篤信の人多き世に愚悪の吾に御廻向あまね
し

足利浄円先生の面影

——常念佛ということ——

西元宗助

年を経るにしたがって、足利浄円先生への想いは深まる、あたかも阿弥陀仏にましますが如くに。

あれは、わたしがシベリアから帰国したばかりのころ、たしか昭和二十五年の夏のことであったか。当時、先生は瀬戸内海の孤島一生の島に住んでおられた。是非、お出でなさいと、仰せくださる。欣びいさんで、夢のような幻のような、この小島に先生を訪れた。そのときのことである。

ある高唱念仏のご僧侶が、しきりに念仏申されながら、失礼ながら、先生は、昨夜来、お見受けするところ、あまり念仏となえられませぬと、たしなめるように言われると、先生、「お恥ずかしいことでございます」と仰せになつて、寂ずかに、お念仏申されながら、「そのわたしどものため、阿弥陀さまが常念仏にてまします。十劫の昔から、夜も昼も、このような私どもを助け救わずにはおかんと、お念仏となつて叫びどおしでおあります」と、さも感に堪えぬように、また寂ずかにお念仏申されるのであつ

その足利先生を招いて講演して貰い、ほんものかどうか、お聞きしてみようではないかと。そしてその交渉の大役を仰せつかった。というのも、わたしはその頃、すでに先生をすこし存じあげていたから。

じつは、今もそうであるが、わたしという人間、どうも落着きがない。それに身心ともに性来脆弱なので、そのころ有名であった岡田式静坐法を修得したいと思つた。幸い、同じ京大仏青の先輩の故曾我了雲兄（本誌主宰の花田正夫先生や京都大学名誉教授の長尾雅人博士と同期）の勧誘によって、当時、東山にあった小林信子女史の静坐社に通つた。その静坐社に時折、お見えになり、小一時間の静坐のあと、短いご法話をしてくださったのが浄円先生でおありだった。そして大地に深く根をおろした巨巖のような先生のお姿に、深くひきつけられるものがあつたのである。

それだけに、仏教青年会の講師としてお願いする交渉の大役は、わたしにとって嬉しいことであつたが、しかし仲間の一部のものの魂胆を知っているだけに、失礼なことにならなければよいがとの、一抹の懸念がないではなかつた。

さて、浄円先生をお招きしての京大楽友会館での講演は、盛会で、さすがは足利先生と、みんなを納得させるものがあつて、わたしはほっとした。そして場所も移して坐談会となつたが、そのときである。テストしてやろうと言つて

た。そしてご紹介になつたのが、先生の叔母君にあたられる甲斐和里子女史の次のお歌であつた。

み仏をよぶわが声は

み仏のわれを喚びますみ声なりけり

わたしは、そのとき浄円先生のおん上に、阿弥陀如来の招喚のおん声を聞く思いがしたことである。

以上のことを想い出すと、今ひとつ、やはり今のごとくに想い起こすことがある。それは昭和五年のころのこと、わたしが京都大学仏教青年会の委員をしていたころのことである。

あるとき、仲間のやんちゃものが言う。お坊さまは、どうもイカサマものが多いが、足利浄円という先生は、どうもほんものだという噂がある。それで西元クン、いっぺん、

いたMが、とつぜん、「先生には、ご信心おありですか」尋問するよりに聞いたずねる。わたしは、なんと失礼なことをと思つたが、もうこうなれば致方がない。会議室はシーンとなつて、先生がどう仰せになるか、みんなは固（かた）ずをのんだ。それというのも、ある先生（あとで勧学になられる）の場合には、「失礼なことを言うな」とお怒りになつて、憤然として退去されたから。それだけに私は、ハラハラとしながら、事態を見守っていた。そのときである。

先生は、沈痛なお顔をなさりながら、「わたしには、なんにもごさいません。ただ南無阿弥陀仏でございませう」と、こう仰せになつて、司会者である私の顔を、じつとご覧になつて、それから静かに低いお声で、

「あなたがたは、それぞれ仏縁深くおありで、ほんとうに有難いことでございます。しかし、申すまでもなく、み仏の世界は、はてしもなく広くして深い。言葉のたえはた世界で、もうこれでよいということはない筈でございます。それに心得たりいうは、心得ぬなりとの蓮如上人のお言葉もございませう」と、哀願するように仰せになつて、席をおたちになつた。

みんなは肅然（じゆくぜん）となつた。わたしは慚愧（ざんき）のうち、あらためて道を求めずんばと、奮（ふる）いたつたことでありました。

最後に、昭和三十五年の五月五日。先生のご病氣、いよいよ重篤という。面会謝絶のことなれど、居ても立ってもいられない気持ち、よって十分間ぐらいならと、家人のお許しを得て、お目にかかせていただくことになった。もう、これがこの世での、いよいよ最後のお別れになるかもと思うと、たまらない。お顔にはすでに涅槃の光がさし、いつそう寂かでおありであった。

その先生が、床上に横たわれたまま、仰せになった。今日は鏡如(光端)上人のお命日(祥月命日は十月五日)なので、上人のご恩を憶い偲びつつ小経を、とぎれ／＼あげさせていただきました。自分は若気のいたりということもあって、半—セイロンにいつか申しましたように、同和のごなどに対する御本山の対応がまことになまぬ、いと、伯父(瑞義)叔母(和里子)の激しく泣いてとめるのも振りきって教団を飛びだしてしまい、そのことで殊に鏡如上人には、たいへんご迷惑おかけしたこと想いだし、慚愧していることですと仰せになった。

しばらくして、つくづくわたしの顔をご覧になりながら、またどうせ、いずれお会いできるんだから、そう心配なさらないでよい、と仰せになって、目をつむられた。先生のお顔には疲労のかけが濃い。もう小一時間はたっている、それで、そつと辞去しようとすると、先生、「もうお帰りか」

わが心地獄

坊さんの御説教で「地獄」とか「地獄の鬼」を未来のように説きますが、段々年をとって来ると、今現在の自分の心を、お念仏のご縁にあり、お念仏にそなわった、目に見えないお光りに照らされて、しみじみと思ひ知らされます。「落つる地獄をおそろしと知れども、その地獄をつくるおのが心を知らぬ」と、地獄は未来にあるように思いますが、そうでない。「今現在」のわが心こそ地獄であり、それなればこそ「歎異抄」で聖人は「とても地獄は一定すみかぞかし」とおおせられるのであります。「すみかぞかし」ということは「今現在、地獄にいる身である。今現在が地獄である」ということであります。その地獄というものが、未来と思うていたら、今現在の我が身であり、一生臨終の一念まで、そういう「地獄一定」の身であると思ひ知らせるオハタラキを「智慧の念仏」とも、「信心の智慧」ともいふのです。「大悲ものうきことなくて、つねにわが身をお照らすなり」大悲の信心、念仏が、我が身、我が心をお照らし

とおっしゃって、合掌しようとなされる。しかし先生の片方の手は、もうあがらない。わたしは、先生のお居間の襖をそつと閉めた。しかし、これがもう今生のお別れになるかもと思うと、たまらない。もう一度、そつと襖をあげてみた。すると、先生は、あがる方の片手をあげられたまま、拝むようにして私のほうをご覧になっていられたのであった。わたしはハツとして、襖のかけに平伏したのであった。

わたしや

あなたに拜まれて

助かってくれと拜まれて

ご恩うれしやなむあみだぶつ

(石見の才市)



木村無相

になってやまぬゆえ「我が心地獄」我が身こそ鬼」ということがわかるので、大悲ものうきことなくて、つねにわが身を照らすということがなければ、地獄こそ我が心であり、我が身が地獄の鬼であったと、知らんじまいで死んでしまふのです。御信心さま、お念仏さまは鏡のハタラキで、地獄、鬼とされるのです。地獄でホトケで「わが心地獄」というトコロでホトケさまのお心がしられ、ホトケさま如来さま、お念仏さま、ご信心さまにあうことが出来るのです。ありがたい心、よろこびの心でホトケさま、如来さまにあうのでありません。地獄というトコロでホトケさま、如来さまのお心にあわせていただけるのです。

我が心地獄、鬼と知らして貰ったり、こうした身にはグチのお念仏しか申せぬ。ほんのうしかない身と思ひ知らせるのです。お念仏を声に出して、二声、三声申せば、グチとほんのうより自分とスグわかる。それは「この世」にある限りその外はもちあわせのない自分であり、一生つ

づくので、たまには御法がよろこべたらそれは如来さま、お念仏さまがよろこばせて下さるので、それこそありがたいことです。お念仏、御信心のオカゲで地獄のわが身が知らされ、こうした地獄のわが身は、お念仏一つよりないということが思い知らされるのであります。わが「機」が助からぬということも、お念仏さま、御信心さまのおかげで知らされ、このような「機」はナムアマミダ仏という「法」より外にないということも、お念仏さま、ご信心さまという「法」によって知らされるのであります。

一、世間の火は家を焼く、心の火は身をやく。心の地獄の火は、わが身をやく。

一、地獄の猛火は、剣山刀樹（ヒトをつきさす心）もわがムネにあり。

一、仏前においてすら、造悪（悪をつくる）の念イッセツナもとどまらず、とても地獄は一定なり。

一、死ぬるは今何年あるうとも地獄はいつも足の下なり。死ぬるのは、ナンネン先であっても地獄は、我が身、わが心が地獄であるから「いつも足の下」である。現在が地獄であるとお、せられるのです。その地獄のわが身であることを知らぬ故それをそれと気づいても自分で地獄から

念仏申してその地獄の身であることを、地獄一定と云うことに気づけば、お念仏よりほかにないことに気づけばよ、お念仏一つでお前の後生は引き受けるということに気づけばよ、いつも／＼そのことを忘れずめのお前であるぞよと。弥陀大悲の誓願をふかく信ぜんひとはみな、ねてもさめてもへだてなく、ナムアマミダ仏となふべし。と仰せられたのである。お念仏申すことは、お念仏申して今から助かるうとすることなく、お念仏によって我が身が地獄であることを思いしれよ、ます／＼お念仏一つよりほかにないことを知れよと云うことなのです。モト／＼グチほんのうの身であるから、グチほんのうのお念仏しか申されぬのであります。お念仏申すことによって、グチほんのうの身であることをいっそう知ることが大切なのであります。

このようなオロカナ、邪見、キョウマンの身にお念仏があたえられ、お念仏が申されることはありがたいことです。ねえ。このような「地獄の身」は「極重悪人」はお念仏一つより助かる道はないから、お念仏をすでにおあたえ下された上に、なお極重悪人唯称仏と、極重悪人である地獄一定の身は、ただ／＼念仏せよ、お念仏をいただいてくれよ、お前の道は、お念仏よりほかにない身だよ、と、「お正信偈さま」に極重悪人唯称仏とおさとし下さっているのです。お互いにあさましいばんのうの地獄の身でありながら、その

ぬけ出すことは出来ぬ。

いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし、で今生だけでなく、未来永劫に「地獄一定」の身であるからなんとかして助けたい、助けねばおかぬと「五劫の思惟」のあげくに、念仏一つで助けよう、ナムアマミダブツ一つで助けよう、お念仏を称える身にして助けようと、そのお念仏、ナムアマミダブツさまの中味を、この私助かるようにしてくださったのが「永劫の御修行」であるのです。そうして、長い間の御方便おそだてで、聴聞する身にさせて下され、お念仏申す身にさせて下され、「我が身は地獄」と知らされ念仏一つで助けようと、お念仏よりほかにない地獄の身であると、いつもいつも知らせようと、如来さまはかりきって下さっておりませう。ほんのうにマナコさえられて撰取の光明見ざれどオタスケのお光明はいつも、照らしづめに照らしているけれども、ほんのうのため目くらにされておたすけのお光明、撰取のお光明を見ることが出来ないが、グチのやまぬ身であるぞよ。一生ほんのうのやまぬ身であるぞよと、照らしづめ、お知らせづめなのです。それでこのようなオロカナシブトイ身であるが、いつも／＼それを忘れがちで浮かれて自分が善人であるように思つてヒトばかりさばっているゆえ、如来さまは、大悲のおこころより、念仏申せ、念仏申せ、

グチ煩惱の地獄の身のままにお念仏申せよ、と。ナニヨリのお念仏さまをいただいておること、お念仏さまを下さっていることはありがたいことです。それこそ如来大悲の恩徳ですねえ。お念仏さまの御恩、如来さまのご恩をナムアマミダブツ、ナムアマミダブツといただきませう。いつも地獄の身であることを忘れぬように。

ナムアマミダ仏

ナムアマミダ仏

祖 堂

筑紫野 春 草

今吾は開山聖人の前にあり、ひくくつぶやく南無阿弥陀仏

故郷に帰り来し思ひ湧き来たり京の祖堂にまうで来ぬれば

いつなりけむ祖堂にまうでわが母と山門の上ののぼりて
見しは

大門の前にうづくまり念仏し大扉開くを待ちかねて居り

自照のこころ

母のことば

昨年秋、亡き母君の五十年忌をつとめられたA氏の述懐である。

幼くして別れた母の言葉に、私が生涯忘れることのできないものが、ただ一つあります。母はいつも「御飯をこぼしたら目がつぶれる」と云い聞かせました。ちょうど、小学生の生意気さかりであった私は、「御飯をこぼしても目がつぶれるか」と云って、さからったものです。母は困った顔をしていましたが、私は大人をやりこめた気持で得意然たるものがありました。その後、間もなく母に別れて、いろ／＼苦勞もし、人生経験もつんで、ようやく「目がつぶれる」というのは、肉眼ではなく、心の眼であった。ものを粗末にするようなものは、心の目がつぶれていると母は教えていたのだということに気がつきました。今日では財界の雄となっておられるA氏は、しみじみと語られた。

こぼれた御飯はきたないから捨てなさいと、教えることもあやまつてはいない。しかし、衛生とか保健とか、通り

佐々木 徹 心

一ぺんの知識だけでは人間は完成されない。ものの本質価値をみる目がつぶれていては、真の人間とは云われないうであらう。

A氏のお母さんは無学な明治の女にすぎなかった。だが敬虔な念仏者であった。「御飯をこぼしたら目がつぶれる」というのは、受け売りの言葉ではなくて、母その人が信仰生活を通じた、仏教で云う行修して身につけたところの言葉である。いわば、母自身の生活が「ものを粗末にしない」ことであつたのである。

經典には母の「におい」は、子供の毛孔からはいると説かれていて「におい」とは生活である。子供に対する母親の影響の大きいことは、今更にいうまでもない。しかし、子供の毛孔からしみこんでゆく母の「におい」が、もし女特有の虚栄心、偏頗な愛情、感情的な狭い見解、そんなものであつたら、いったいどんな子供になるであらうか……われ／＼は、毎日子供にむかつて教訓的なことを云つて

いる。しかし、親自身が実践しない言葉では、子供に対して空砲ほどにもひびかない。むしろおそれつつしむべきは、親自身の生活である。

受け売りの言葉に、いささか食傷している私は、その人の生涯をかけた、ただ一句の言葉を聞きたいと思つていてくる。私はこの一句を聞き得てよろこぶとともに、未だ私自身が子供にのこす一句の言葉を体得していないことを寂しく思う。

(昭和三十二年三月十五日) 三ヶ月前

如來の御弟子

Bさんが、たった一人のお嬢さんを亡くされてから、もう五年になる。打ちのめされた悲しみの中から、Bさんは「やがてお浄土で再び会える」これが今の私の慰めであり、また生きる力であり、と云って静かに念仏申しておられた。長女を喪つた悲しみをもつ私は、浄土を俱会一処の世界として味っておられるBさんの心に同ずることができた。

その後毎年、お嬢さんの祥月命日にはおたずねして、Bさんと仏法味を語ることにしている。昨年の御命日には、次のような心境を述べられた。

私は往生浄土の教とは聞きながらも、信仰は現実の問題として、浄土ということには関心がありませんでした。念仏申すことによつて、自分の愚かさを知らしめられ、怠慢な私がいささかでも内省し、御恩を感じることは、ひとえにお念仏のたまものであると、喜んでいました。ところが、娘が亡くなってから急に浄土が問題になつて『阿弥陀經』の俱会一処というお言葉が、当時の私の救いでありました。お浄土で再び娘と会つて頂くのだという私の信誓は、浄土を思うて念仏申す一声々々の、そのお念仏の中に、つねに亡き娘と会つていこうという信味にまで深められて、愚痴に沈んだ私に明るい世界を与えて下さいました。

この頃は少し変つた心境になりました。浄土は自他平等の世界である。この世でこそ親であり子である。それで親がわが子を愛しむということもありましようが、浄土へ参つてまで、我が子を執ずることはいかかであらうか。広門示現のお浄土は、そのまま一法句である。一如であり涅槃であると聞かされている。我が子に偏愛する私の迷妄な心が転ぜられてこそ、自他平等の浄土でなければならぬ。こんな気持になつたのであります。『歎異抄』第五章に

親鸞は、父母の孝養のためとて、一返にても念仏まふしたること、いまださふらはず、そのゆへは一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり

六これは今迄、何度も拝読したのですが、「一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり」というのが、どうもびつたりときませんでした。ところが、浄土を念ずることによって、我が子に即して一切の人々が、みな世々生々の父母兄弟であるというような感じがしてくるのです。充分に私の気持を表現できませんが、何だか心が広くなったように感ずるのです。人間というものは、自分のことや家族のこととは真剣になりますが、世間のことなどはどうでもよいのです。そんな私ではありますが、此の頃はせめて娘の命日だけでも、死んだ子を縁として一切の有情を念じたい、こんな心境になったのであります。

Bさんの述懐を承って、私は『歎異抄』第五章を話題にして、四方山を語った。それから今年の御命日である。Bさんは、こう語られた。私は先日『浄土和讃』を拝読して、

安樂無量の菩薩 一生補処にいたるなり

普賢の徳に帰してこそ 穢国にかならず化するなり

この御和讃の「一生補処」の御左訓に「ごくらくにまいりなば弥陀の一の御弟子となるころなり」とあることに気がつきました。浄土に参ることは弥陀の御弟子の一人となることである。一生補処の菩薩になるといつても、実感がありませんが、如来の御弟子にさして頂くと聞けば、あ

歎異抄に導かれて (三)

第二章(浄土への正門)

「各々十余ヶ国のさかひをこへて、身命をかへりみずしてたづねきたらしめたまふ御ころぞし、ひとへに往生極樂のみちをとひきかんがためなり」

この当時の日本は、戦乱の世とて、関所々々の守りも堅く、途中でどんな災難にあうかも知れないのに、八十過ぎられた親鸞聖人を関東からはる／＼京洛におたずね申し、ただ／＼往生浄土の道ひとつをお聞かせいだきたいと申し上げたのであった。文字通り再会を期し難い一期一会の会见である。聖人はその一人々々の申出を十分に聞きとられ、敬愛の情のあふれる丁寧なお言葉で迎えられ、煩惱具足の凡夫の人界受生の目的は、ただ往生の道ひとつを聞きひらくにあると同心されている。

源信僧都は「横川の法語」に、まず三悪道を離れて人間に生ること大きなよろこびなり、……本願に遇ふことを喜ぶべし、と随喜されている。また良寛師のお歌にも

りがたいですね。弥陀同体の証を開くということも、師弟その徳を同じくするということでございましょう。弟子とは師の精神を承け、師の業をつぐべきものである。

「普賢の徳」の御左訓には「われら衆生ごくらくにまいりなば大慈大悲をおこして十方にいたりて衆生を利益するなり、仏の至極の慈悲を普賢とまふすなり」とあります。如来の大慈大悲心を体して衆生摂化の大業に、私も如来の御弟子として翼賛させて頂くのである。それが「穢国にかならず化するなり」とある還相回向ということではないでしょうか。やがて浄土に参りなば、弥陀の御弟子として「大慈大悲心をもて、おもふがごとく衆生を利益する」ことであります。先ずこの世で、私は余生を仏弟子という自覚と喜びにおいてすごしたい。殊に一人の娘を亡って、ほかに子供のない私でありますから、それだけ生活の余裕もあるわけでありまして。愚かなままに念仏して、少しでも世の御用に立たしてただかねばならぬと思っております。

私はBさんの述懐を承って、これはBさん一人だけではない、同一に念仏するものの信誓でなければならぬと思つた。さて来年の御命日には、どんな話を承ることができようか。念仏者として「生きる」ことの幸せを思う。

(昭和三十年七月十一日)

花田正夫

不可思議の弥陀の誓のなかりせば何をこの世の思ひ出とせん

と。誓願不思議にあえたことが、人間に生れた唯一のよい思い出であったと讃仰されている。

もとより人間のよろこびにも種々あるが、例えば名譽、地位、財産などつけた着物でなく、素裸のなりのよろこびに恵まれるのである。「元旦や何はなくても親二人」という有名な句もあるが、地上の親は無常の嵐に、愛別の悲しみはのがれられない、生死を超えた喜びはたゞ聞法一つにひらけるのである。

「しかるに念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、こころにく、おぼしめして、おはしましてはんべらんは、おほきなるあやまりなり。

もししからは、南都北嶺にもゆ、しき学生たち、おほく座せられてさふらふなれば、かの人々にもあひたてまつりて、往生の要よく／＼きかるべきなり」

（岩石かりなり）

次に、聞法者の目の着けどころを一点に定められて、往生の道は念仏ひとつと指摘され、ほかのことを聞くのがお望みなら、奈良や叡山に、すぐれた有名な学者達が大勢おいでになるから、浄土に生れて覺を開くに肝要な点をくわしくお聞きになるがよい、と仰言るのである。

「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいからすべしと、よき人のおほせをかふふりて信ずるほかに別の子細なきなり」

もとより御前を去る者は一人もなく、同行方の目は、往生浄土の道一つに凝集して、固睡をのみ、聞き耳を立てている。さて聖人の御意中を憶うに、そこに関東の同行の姿はなく、よき人、法然上人の慈声ばかりである。

「親鸞におきては」の一句は、巖盤地殻から生え抜いた巨巖の如く、金輪際ゆるぎのないたしさがあつた。そして恩師の仰せ「選択本願の念仏、往生之業念仏為本」のみ声そのままを「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」と表白せられたのである。

ここに私共の胸に放佛として浮かぶのは六十九才の円熟された法然上人と、二十九才の聖人の会見である。叡山二十年の修学も空しく山を下られ、六角堂に参籠の末、吉水に師を尋ねられる聖人、迎えられる恩師は慈顔念仏の中から、実は自分もと、三十年の苦行も愚痴十悪の身にはすべ

ん、また地獄におつる業にてやはんべらん、総じても存知せざるなり。たとへ法然上人にすかされまいらすべしと、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。その故は、自余の行を上げみて仏になるべかりける身が、念仏をまうして地獄にもおちてさふらはばこそ、すかされたてまつりてという後悔もさふらはめいづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

ここに、よきひとの仰せをただかかれた聖人の内心をそのまま吐露されたのである。御自身は念仏のいわれを知る智慧もなく、色々な行を修する能力もなく、これからさきいつまで経つても浮かぶ瀬もない身であるから、よしんば御師匠にだまされて、念仏して地獄におちたとしても後悔するところはない、と念仏にこころを定められたのである。近角先生は「お慈悲一つで人生手放し」と仰言っている。私共は何をするにも結果ばかりに目をつけているが、絶対他力の大信心は、浮くも沈むも弥陀仏のおほからいにおまかせ申すという絶対帰依の信味を讀えられた。

「弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。仏説まことにおはしまさば、善導の御釈虚言したまふべからず。善導の御釈まことならば、法然のおほせそらごとならんや。法然のおほせまことならば、

て甲斐なく、渡に舟なく、闇に道に迷うたま、を打ち明けられ、幸に善導大師の四帖の疏によって「一心専念弥陀名号、行住坐臥不問時節久近、念々不捨者、名正定之業、順彼仏願故」の一文、特に、順彼仏願故の一句にその玄意を得「余が如き下機の行法は念仏一つ」とさせて頂いたのですと、念仏裡に語られたことであらう。

而聖の歩調はおのずと一致し、そこにはもう人間の言葉は無用で、念仏の声があふれたことであらう。

池山先生は有縁の者にいつも口や筆で「親鸞におきてはただ念仏して」とお勧め下さつた。それと云うのも、先生の四十二歳の時、社会事業も思うにまかせず、自分の生涯の目的であつた名譽も、煩惱具足の身にはたとえ得られたとしても虚名であると自省され、明日への希望の灯も消えた時、残るは信心一つが欲しいとそこに心が凝集した刹那「親鸞におきてはただ念仏して……」の一句が心に浮かびそれが金文字となつて畳にうつつた刹那「あ、聖人もそうされたのか、じゃ池山も」とそこに引きつけられるなり、念仏がとめどなく口にあふれ、光の滝を浴びたようであつた。そこに心の闇は破られ、たのもしき信海が開かれたと、くりかえして語られ、聖人のみ跡をお慕いするようにと願ひ続けて下さつた。

「念仏はまことに浄土にうまるるたねにてやはんべらん

親鸞がまふすむねまたもてむなしかるべからずさふらふか」

おもうに無我な人は、曇りのない凹凸のないガラスを透して、外の姿がそのままに映るように、真実をそのまま、開示する人である。そこに万人の仰ぐべき久遠の道がある。

さて、こう述べられる聖人の上に、弥陀・釈迦・善導・法然と一つに融けた輝きが仰がれる。如来出世の本意たる弥陀の本願を説かれた釈尊は、光顔巍巍々と輝いておられたように、こう仰言る聖人もまたそうした御満悦のお姿を拝したことであらう。

「詮ずるところ、愚身が信心におきては、かくのごとし。このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんと、またすてんと、面々の御はからひなりと、云々」

この聖人の御自督をお聞きして、そのまま念仏申した人もあらうが、機縁熟さぬ人々を聖人は顧みられて、やがては仏力の催しで必ず救われると確信され乍ら、愚身の信心はこの通りである、このうへは取捨は御自由にと結ばれたのである。

1119

あ
と
が
き

近角先生は御母堂の重病中に念仏のたのもしさ、よしあしを超えた妙味を御信証下さいました。くりかえし御味読下さいますように。

白井先生の十三回忌を八月にお迎えしました。先生はことに聖徳太子を生涯かけて御讃仰下さいました。今回は太子の十七憲章の第十条。和の泉の湧出するところをお示し下さいましたものを頂きました。平和々々の声はいたるところが高いのでありますが、その根源にたずね入る人は稀であります。先生によってそこを導かれましょう。

井上先生は、義なきを義とす念仏の妙味をそのままに讃えられました。義理の親子には、親と思う、子と思うというはからいがつきまといますが、生みの親には無用であります。久遠のみ親を他人扱い申すことは悲しい限りであります。そうした身に喚びかけられる大悲に引きもどされ引きもどされて信の旅を辿らせて頂くのであります。

西元先生は足利浄円師に導かれ、御身にかけて仏法を開示して下さいました信徳をお教下さいました。常念仏の師、無信の大信界に自適される師の面影が浮かびます。

木村無相さんの底をついた信味、岩崎成章師のおかげで

掲げました。続々念仏詩抄が出版され、亡くなられていよいよ徳光の輝くの襟を正さしめられます。
佐々木徹心様は、不思議にもよき師にめぐまれ、京都女子大にあって、白杵・足利・白井と相承された自照誌に最後まで御尽力頂きました、ここにありし日を偲び一文をいいただきました。

木村無相著、御案内

念仏詩抄 定価一〇〇〇円

続念仏誌抄 定価一三〇〇円

続々念仏誌抄 定価一三〇〇円

発行所 京都市下京区花屋町通西洞院西入

永田文昌堂

振替 京都 二一九三六番

電話 〇七五―三七一―六六五一

定価 半年 八〇〇円(送共)
一年 一六〇〇円(送共)

印刷人

天野昭夫

名古屋市南区駆上二丁目三九

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

編集・発行人 花田正夫

発行所

慈光社

電話 八二一七〇三七番

振替口座 名古屋 六二四七番
郵便番号 四五七

勝勢至菩薩

十三 ~~十一~~ 大受會

RISHON HOUSE
植山勝勢
P.45

（地上の菩薩如）

あらゆる世の
衆流（古趣流轉の世）

（みよこころ冥合）
（いと深合）と更に累趣（べつ別異の

世界）なきに及ばず

故に大（大乘）

の教明かならず

9月9日(土)

法
会

